

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 8 月 31 日現在

機関番号：33936

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463439

研究課題名(和文) 混合病棟の小児看護初心者を教育する中堅・達人のための小児看護人材育成プログラム

研究課題名(英文) Human Resources Development Program in Pediatric Nursing Designed to Help Mid-level and Expert Staff in charge of Training Beginners in Pediatric Nursing in Mixed-division Wards

研究代表者

倉田 節子 (Kurata, Setsuko)

人間環境大学・看護学部・教授

研究者番号：50352050

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、混合病棟において、小児への看護が初心者である看護師への教育担当者が抱える課題とその方策を明らかにし、それをもとに作成した研修プログラムを教育担当者対象に実施し、参加者から得られたデータによってプログラムの評価を行った。本プログラムは、混合病棟における小児看護初心者への教育担当者の教育力や気づきを高めるだけでなく、小児看護初心者という同僚を認め、尊重し合う組織文化の育成にも貢献する可能性がある。

研究成果の概要(英文)：The present study demonstrated the challenges facing staff in charge of training nurses who are beginners in pediatric nursing in mixed-division wards, and identified measures necessary to improve the situation. Based on this information, a training program for staff in charge of training these nurses was formulated and implemented. The program was evaluated using data collected from participants in the program. This program does not only have the potential to enhance the training skills and findings of staff who train beginners in pediatric nursing in mixed-division wards, but also to contribute to a nurturing culture within the organization, by recognizing inexperienced colleagues in pediatric nursing, and fostering mutual respect.

研究分野：小児看護学

キーワード：混合病棟 小児看護初心者 教育支援プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

近年、少子化による入院する子どもの減少、医療の進歩による外来治療や在宅療養の拡大等の影響から成人との混合病棟となっている病院が増えている。その中で、子どもの平均在院日数は8.9日(2008年)と短縮化が進んでおり、看護師は素早く情報収集し、適切な判断のもとに必要な援助を行う必要がある。もとより、子どもへの看護ケアは、成人に比べ多くの人の手を要す上に、認知能力、言語能力が発達途上であるため対象理解も容易ではないことから、特殊性が高い。しかし、入院が短期間であっても、子どもには常に成長発達を促す援助や子どもの家族への育児支援が必要である。しかし、成人と小児の混合病棟を有する総合病院では、短期間で看護師が配置転換されることが多く、小児看護を専門とする看護師が確保しにくい。これまで、混合病棟で成人患者とともに、小児患者への看護をする看護師が抱える問題や支援についての報告はあるが、看護師としてのキャリアはあっても、特殊性の高い小児への看護が初心者である看護師(以後初心者)を教育する小児看護の中堅・達人看護師(以後中堅・達人)がどのような問題を抱え、支援を求めているかは明らかにされていない。今後も、小児病棟が混合病棟に移行する傾向は多くなることが予測され、人的環境として小児看護の専門性を備えている看護師の多い小児専門病院に比べ混合病棟においては、初心者だけでなく、その教育を担当する中堅・達人を育成することが急務である。教育担当者の育成プログラムを開発し、混合病棟における小児看護の質の向上を図ることは、子どもの家族への子育て支援の強化や看護師の離職防止につながり、社会的ニーズとしても重要な課題である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、混合病棟の小児看護初心者を教育する人材を育成するためのプログラムを開発し、その効果を明らかにすること

である。

そのために計画している項目は、A.混合病棟の小児看護初心者を教育する小児看護の中堅・達人が抱えている課題について検討し、育成プログラムを開発する、B.混合病棟の小児看護初心者を教育する人材を育成するためのプログラムを試行し、アウトカム指標の分析・評価から育成プログラムの効果を明らかにする、C.育成プログラムの実施・評価を通じ、プログラムを修正・改良することである。

### 【用語の定義】

「混合病棟」:成人と小児の患者が入院している病棟

「初心者」:他の看護経験があり、小児看護経験が1年未満の看護師

「中堅」:小児看護経験が3~5年の看護師

「達人」:小児看護経験が5年以上の看護師

## 3. 研究の方法

【平成26年度】

### 混合病棟における小児看護初心者への教育の課題とその方策

【目的】小児と成人の混合病棟において、小児看護初心者(他の看護経験があり、小児看護経験が1年未満の看護師)の教育を担当する看護師への支援は十分とはいえない。本研究は、小児看護初心者の教育担当者の現状把握として、教育担当者が抱える問題とその対処を明らかにすることを目的とする。

【方法】混合病棟で小児看護初心者への教育経験のある小児看護経験3年以上の看護師を対象に2014年7月~2015年3月に半構成的面接法を行い、混合病棟において小児看護初心者への教育を担当する上でどのような工夫をしているか、どのような困難があるか、その困難に対しどのように対処しているか等について尋ねた。面接内容は許可を得て録音し、逐語録をもとに内容分析を行った。倫理的配慮として、研究協力施設長、看護総責任者、病棟責任者、研究協力者に研究の目的・方法、参加に対する自由意思の尊重、プライバシーの保護、結果の公表について文書および口頭で説明し同意を得た。尚、本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得て

実施した。

【平成 27 年度～平成 28 年度】

## 1. 既卒小児看護初心者の強みを活かす小児看護実践を見出すためのセッションの開催

【目的】小児と成人の混合病棟において、他の看護経験があり、小児看護経験が 1 年未満の看護師（小児看護初心者）の教育を担当する看護師への支援は十分とはいえない。本研究は、既卒の小児看護初心者の強みを活かす教育について、小児看護初心者とその教育担当者がおこなったリフレクションの様相を明らかにすることを目的とする。

【方法】2016 年 7 月に小児看護初心者への教育担当者がとらえている教育の課題と方策について、混合病棟での調査結果をもとに話題提供し、その後、参加者同士の 4～7 名のグループでのリフレクションを行なった。参加者は既卒の小児看護初心者の強みを活かす小児看護実践について 45 分間リフレクションを行ない、終了後、無記名自記式の感想用紙を記述してもらった。記述されたデータは、内容分析を行なった。尚、本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 2. 人材育成プログラムの作成およびプログラムの実施と評価

【目的】小児と成人の混合病棟において、小児看護初心者（他の看護経験があり、小児看護経験が 1 年未満の看護師）の教育を担当する看護師への支援は十分とはいえず、人材育成が必要である。本研究は、小児看護初心者の教育担当者を対象に実施した研修プログラム（以後プログラム）の評価を明らかにすることを目的とする。

【方法】混合病棟で小児看護初心者への教育経験のある小児看護経験 3 年以上の看護師を対象に 2016 年 1 月～9 月の期間に、リフレクションを取り入れたプログラムを 2 回実施した。各回 90 分とし、1 回目は、研究者によ

る小児看護初心者の教育担当者が抱える課題と方策についての講義の後、参加者の教育実践を共有し、自己の課題、それに対する目標と計画を「取り組みシート」に記入し半年間取り組んでもらった。2 回目は、半年間取り組んだことについて発表し意見交換した。各回ともリフレクションに精通した共同研究者がファシリテートした。

2 回目終了後参加者への個別面接調査によって得られたデータをプログラムの評価として分析した。面接内容は許可を得て録音し、逐語録をもとに内容分析を行った。倫理的配慮として、研究協力施設の看護総責任者、病棟責任者、研究協力者に研究の目的・方法、参加に対する自由意思の尊重、プライバシーの保護、結果の公表について文書および口頭で説明し同意を得た。尚、本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 4. 研究成果

【平成 26 年度】

5 施設から研究協力を得ることができ、病床数 26～55 の混合病棟における小児病床数は 10～27 であった。混合の診療科は、内科、神経内科、泌尿器科、眼科、歯科、皮膚科、耳鼻科、地域包括ケア病床であった（表 1）。

表 1 研究協力施設の概要

施設	病棟病床数	小児病床数	小児患者に多い疾患	小児患者平均在院日数	混合診療科	看護師数(師長・係長除く)	勤務体制	教育体制
A	55	小児科20、小児外科7	感染症(肺炎、胃腸炎)、本フローゼ、気管炎	7.7	眼科、歯科、皮膚科、耳鼻科、がん化学療法	33	3交替制	フセブターシップ
B	26	不定	感染症(肺炎、胃腸炎)、川崎病、本フローゼ	7.0	内科(女性のみ)	12	2交替制	フセブターシップ
C	40	10	白血病、感染症(肺炎、胃腸炎)、低身長検査、入院	18	神経内科	27	2交替制	フセブターシップ、チューター
D	34	10	感染症(肺炎、胃腸炎)	7.8	泌尿器科	23	3交替制	フセブターシップ
E	26	12	感染症(肺炎、喘息)、性気管炎、喘息、川崎病	6.3	地域包括ケア病床	21	2交替制	フセブターシップ

研究協力者は 8 名で、全員女性、20 代 3 名、30 代 3 名、40 代 1 名、50 代 1 名、平均小児看護経験年数は 8.15 年、平均看護経験年数は 12.79 年であった（表 2）。

表2 研究協力者の概要

No	性	年齢	小児看護経験年数	合計看護経験年数	新卒からの小児看護経験	混合病棟への配属希望	卒業基礎教育課程
1	女	30代	12.33	15.33	なし	なし	専門学校
2	女	30代	10.0	10.0	あり	あり	専門学校
3	女	20代	5.25	5.25	あり	あり	短大
4	女	20代	5.42	5.42	あり	あり	大学
5	女	30代	7.0	11.33	なし	なし	その他
6	女	20代	3.67	5.5	あり	なし	その他
7	女	50代	5.5	27.5	なし	なし	専門学校
8	女	40代	16.0	22.0	なし	なし	専門学校

データ分析の結果、小児看護初心者教育の課題には、小児看護初心者の【小児患者の特性に合わせた看護が展開できるまでの戸惑い】や【小児との混合病棟における看護の切り替えの困難さ】とともに、教育担当者の自分より年上の小児看護初心者への指導のやりづらさを感じる等の【教育を実施する上での戸惑い】や【教育準備体制の不十分さ】があった(表3)。

また、小児看護初心者への教育の方策には、【知識・技術の到達状況の把握】、成人チームよりも小児チームからスタートする等の【キャリアを尊重した教育】や小児特有のケアや観察のポイントを示す等の【小児看護の特性を強調した教育】をしていた。教育担当者は、【混合病棟における小児看護の質の維持・向上】に努めるために、自己の看護を振り返り、常に関心をもって意識的に勉強する姿勢がみられた(表4)。

表3 混合病棟の教育担当者がとらえた小児看護初心者教育の課題

カテゴリ	サブカテゴリ
小児患者の特性に合わせた看護が展開できるまでの戸惑い	小児患者の方が入院が難しい
	小児患者の方が状態変化しやすい
	重症の小児患者ではケアの負担が大きい
	小児と母親の両方への配慮が必要である
	小児よりも母親への関わりに戸惑う
	細やかな小児の輸液管理に戸惑う
	時間や人手がかかる小児の処置・ケアに戸惑う
	見知らぬ小児疾患への対応に戸惑う
	言葉で表現しない小児の症状・苦痛をキャッチすることが難しい
	発達段階に応じた小児への関わり方がわからない
できると思っていた技術や調整役割が対象が小児だとできないことがある	
成人看護より小児看護の方が難しい	
小児看護を希望して異動したわけではない	
混合病棟における看護の切り替えの困難さ	成人チームにおいても小児看護ができないといけない
	小児患者と成人患者の両方に対応するのが難しい
	小児患者に手がかりが成人患者とゆっ／＼関われない
教育を実施する上での戸惑い	年上の小児看護初心者への教育は難しい
	小児看護技術の到達状況を一目で把握することが難しい
	教育担当者の小児看護の知識や経験が十分でない
	教育が適切かどうかかわからない
教育準備体制の不十分さ	小児特有の看護を外部研修で学ぶチャンスが少ない
	教育体制が整っていない

表4 混合病棟における小児看護初心者への教育の方策

カテゴリ	サブカテゴリ
知識・技術の到達状況の把握	知識・技術の到達状況を本人任せにせず確認する
	知識・技術の到達状況は本人に任せている
キャリアを尊重した教育	教育は経験の多いスタッフが担当する
	これまでの経験を活かして小児看護に適用するのが速いことをふまえる
	これまでの経験をふまえて指導する
	成人と小児どちらのチームに配置するかを考慮する
	早く慣れるように担当やチームを考慮する
小児看護の特性を強調した教育	教育内容・方法は新卒とは異なる
	内容によっては新卒と同じように教育する
	小児看護に関しては教育担当者の方が先輩だと割り切る
	成人とは違う小児への特殊なケアを念入りに教育する
	小児や親との関わりに戸惑うことを予測して教育する
混合病棟における小児看護の質の維持・向上	小児看護で重要・特殊なケアや観察・アセスメント方法を具体的に伝える
	小児特有の疾患を勉強会で学ぶ
	スケジュールやマニュアルに沿って教育する
	小児看護の質の向上を目指すには努力が必要である
	小児看護の質を担保するためには努力が必要である
	看護の振り返りをするなどでよりよい小児看護を考える
	小児看護と成人看護両方の経験は教育担当者にとって有意義である

【考察】教育担当者は、新卒とは違いキャリアのある小児看護初心者への教育について、そのキャリアを尊重しながら、小児看護の特殊性を伝えることを重視していることが明らかになった。教育担当者への支援を検討するためには、小児看護初心者が早く小児看護に慣れることを目指した管理的な視点だけでなく、小児看護初心者個々の経験をふまえることが必要であることが示唆された。教育担当者が生涯にわたって知識を探求していくことの模範を示すために、経験学習によって教育担当者自身の間違いや誤解も含め、自己の理解の変化を確認することができるような支援が必要である。

【平成27年度～平成28年度】

1. 34名の参加者のうち30名から協力を得た。小児看護初心者4名、教育・管理担当者26名であった。データ分析の結果、小児看護初心者では、自身の経験や強みを発揮したらよいとの気づきや、役割や課題などの【気づきや学びを得る機会となった】。また、若い経験の浅いスタッフとのかかわりを振り返り、【同僚からケアされていることに気づいた】り、職場では話せない悩みを語り様々な意見を聞くことで【頑張りうと思えた】。一方、教育・管理担当者では、他施設の【話を聞き共有できて有意義だった】ことや、皆同

じ悩みを持っていることを知り心が【救われた】思いが示された。また、教育担当者と小児初心者との思いにギャップがあることを感じ、小児初心者のキャリアや強みを活かしながら小児科のローカルルールを伝えるなど、【教育課題と方策を確認した】と記されていた。さらに【小児初心者個人の以外の問題に気づいた】り、【看護の基本への気づき・探究心の刺激・学びの機会となった】りする機会になっていた。

【考察】小児看護初心者は、リフレクションによって、自身の経験や強みの大切さ、同僚からのケアに気づき、頑張ろうという気持ちを得ていた。教育・管理担当者はリフレクションをすることで、小児看護初心者への教育について、個々の経験とキャリアを尊重し、小児看護の特殊性を伝えることに気づいていた。さらに、教育・管理担当者は小児看護初心者を取り巻く背景から問題に気づくなどの学びの機会となっていた。ナラティブは、優れた看護実践に欠かすことのできないケアリング実践を目に見えるものにするが、リフレクションという経験学習のための環境は、そのような機会を与えていることが示唆された。

2. プログラムは2施設から協力を得て実施した。混合病棟の平均小児病床数は20.5、混合の診療科は、泌尿器科、口腔外科、眼科、内科であった。プログラム参加者は6名で、全員女性、20代1名、30代2名、40代3名、平均小児看護経験年数は10.71年、平均看護経験年数は16.81年であった(表5)。

表5 研究協力者の概要(プログラム参加者)

No	性	年齢	小児看護経験年数	合計看護経験年数	新卒からの小児看護経験	混合病棟への配属希望	卒業基礎教育課程	婚姻	子ども
1	女	40代	7.25	15.58	なし	なし	短大	あり	あり
2	女	40代	12.0	27.0	なし	なし	専門学校	あり	あり
3	女	30代	10.5	12.75	なし	なし	短大	なし	なし
4	女	20代	6.5	6.5	あり	あり	専門学校	なし	なし
5	女	30代	6.0	16.0	なし	なし	専門学校	あり	あり
6	女	40代	22.0	23.0	あり	なし	短大	あり	あり

データ分析の結果、プログラムの評価は、「プログラムの実施に対する評価」と、「プログラムの内容・方法に対する評価」に分けられた。

「プログラムの実施に対する評価」として、参加者がリフレクションを通して【小児看護初心者の立場になった】ことで、【小児看護の醍醐味を伝え】、小児看護初心者に子どもの観察項目やケアのポイントなど【小児特有のことは優先して伝えた】り、混合病棟で小児と成人の両方がみることができるよう【小児看護初心者の経験を支えた】ことによって、【特殊性の高い小児看護の経験を積み重ねられるように配慮した】ととらえていた。また、教育担当者が【小児看護初心者のキャリアから学んだ】ことや【小児看護初心者のキャリアを考慮して対応した】こともプログラムの成果としてとらえていた。一方、小児看護初心者教育のお手本がなく、相談する先輩看護師が少ないことから、【自信をもって小児看護初心者教育ができるような支援が必要だった】、【小児看護初心者教育の評価は難しかった】と振り返り、小児看護初心者の経験の機会を確保するためには、【医師にも小児看護初心者教育に協力を得る必要があった】とプログラム実施における課題をあげていた。

「プログラムの内容・方法に対する評価」では、参加者自身が指導的立場になった時期に研修プログラムに参加でき、参加者が各チームのリーダーで話しやすかったことや、プログラムの間隔は、計画を実施し目標を評価するために必要な期間であったことなどから、【プログラムの実施方法は適切であった】と評価していた。リフレクションのファシリテートによって、【グループワークで思いを表出できた】ことや、【取り組みシートがあることで意識して教育に取り組めた】ことは、【小児看護初心者教育の課題を明確にする

【プログラムを継続して成果を還元しなかった】ととらえていた。

また、取り組みシートに課題や目標を明文化することが難しく、日々の業務の中で【プログラムの目的に沿った実施や評価が難しい】ことが課題としてあげられ、教育担当者へのサポートの必要性が示された。

【考察】「プログラムの内容・方法に対する評価」では、【プログラムの目的に沿った実施や評価が難しい】といった課題はあるものの、リフレクションのファシリテートによって、【グループワークで思いを表出できた】り、【取り組みシートがあることで意識して教育に取り組めた】と、概ね好評価を得ていた。「プログラムの実施に対する評価」では、教育担当者が【小児看護初心者の立場になった】【小児看護初心者の経験を支えた】【小児看護初心者のキャリアから学んだ】等、小児看護初心者の経験や置かれた状況を尊重する姿勢が散見される。同時に、【小児看護の醍醐味を伝えた】【小児特有のことは優先して伝えた】といった教育担当者自らの専門性に気づく機会になっていた。

本プログラムでは、1) 初回に小児看護初心者の教育担当者が抱える課題と方策の講義、2) 半年間にわたる取り組みシートの活用、3) 開始時と終了時 2 回の教育担当者のリフレクション、を取り入れている。教育担当者は、プログラムを通じて、小児看護初心者と自身の経験や強みの大切さに気づいていることが示された。

本プログラムは、混合病棟における小児看護初心者教育担当者の教育力や気づきを高めるためだけでなく、小児看護初心者という同僚を認め、尊重し合う組織文化の育成にも貢献する可能性が考えられる。

研究の限界として、研修プログラムの第 1 回目と半年後の第 2 回目両方に参加できる研

究協力者を確保することが困難であり、予定していた人数より少なかったことから、プログラムの評価指標として計画の段階で予定していた、尺度との関連を明らかにすることができなかった。

今後は、対象施設および対象者数を拡大し、客観的な評価指標を取り入れ、現場で活用できる研修プログラムとして洗練していくことが課題である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

・倉田節子、永田真弓、青木由美恵 (2016) 教育担当者がとらえた混合病棟における小児看護初心者への教育の課題と方策、ヒューマンケア研究学会誌、7(2)、11-18

〔学会発表〕(計 3 件)

・倉田節子、永田真弓、青木由美恵 (2016) 教育担当者がとらえた混合病棟における小児看護初心者への教育の課題とその方策、第 35 回日本看護科学学会学術集会、広島

・倉田節子、永田真弓、青木由美恵 (2017) 既卒の小児看護初心者の強みを活かそう！、日本小児看護学会第 26 回学術集会、大分

・Yumie AOKI, Setsuko KURATA, Mayumi NAGATA (2017) Refractions on Education Utilising Strengths of Child Health Nurses Experienced in Other Specialised Fields, The 3rd International Society of Caring and Peace Conference, Fukuoka

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

倉田節子 (KURATA, Setsuko)  
人間環境大学・看護学部・教授  
研究者番号：50352050

### (2) 研究分担者

永田真弓 (NAGATA, Mayumi)  
関東学院大学・看護学部・教授  
研究者番号：40294558

青木由美恵 (AOKI, Yumie)  
関東学院大学・看護学部・教授  
研究者番号：60347250